

埼玉育ちのグローバル人



僕が僕であるために～世界という世界の中で

第1回 希望 オペラとの出会い

オペラ歌手テノール、新国立劇場合唱団メンバー

コル・カント合同会社 代表社員、NPO 団体 富士見みんなでプロジェクト 代表

東海林 尚文さん



埼玉県マスコット「コバトン」

「はじめに ～オペラって何だろう?～」

知っている人は案外少ないと思う、いやほとんどの日本人は知らないといって過言ではないだろう。そこで、まずはオペラに対するイメージを探ってみよう。

- 難しそう
 - 敷居が高い
 - 外国語で何を言っているか分からない
 - つまらない、退屈だ
 - チケットが高すぎる
 - 太ったオジサン、オバサンが絶叫している
 - そもそもクラシックに興味がない
- などなど・・・

自分で書いていてもハキ気がするほどネガティブなイメージだ。いくら「これは芸術です!」と言われたところでこんなイメージの芸術など誰が楽しもうと思うのか。実は私も当初はこういったイメージしか持っておらず、さらに言えばオペラという言葉さえ知らなかった。

そんな私が今や日本で唯一のオペラハウス「新国立劇場」でオペラ歌手としてオペラの舞台に出演しそれを生業としているのだから人生とは面白い。

とても人様の参考になるような話ではないがグローバル人材育成センター埼玉とのご縁があり今回エッセイを書く機会を頂けたので自らの半生を振り返って、全3回にわたってオペラに出会うきっかけやイタリア留学のことそしてこれからの夢

なんかを随筆していきたいと思っている。拙い文章になってしまうと思うが、どうか全3回お付き合いくださればありがたい。

「野球少年だった私の生き立ち」

まず少し私の生き立ちについて触れていこうと思う。

私は埼玉に生まれ育ったごくごく普通の男の子であった。両親は共働きで公務員をしていて非常に一般的な家庭で育った。とくに勉強が得意でもなく、成績も中の下くらいだったと思うがとにかくいろいろなスポーツをやっていた記憶がある。剣道、水泳、テニス、卓球とりわけ野球が大好きで小学校4年から大学生までひたすら野球に取り組んでいた。都内の私立高校に進学し、高校では甲子園を目指し東京都大会に出場して西東京大会でベスト8や、ベスト16の成績を残すこともできた。私は人生の半分を野球に捧げてきたといってもいいくらいだ。そんな根っからの野球少年だった私だが、今振り返ってみると小学生のころに音楽との縁も浅からずあったのだと思い返されることがある。

そのエピソードを少しお話ししたいと思う。

小学校5年生になったばかりの頃に小学校の音楽の先生に突然呼び出され「川越少年少女合唱団に入りなさい」と言われた。「音楽なんてまったくやったことのない私が何で合唱団に入らないといけないのか?」という疑問はあったのだが、先生の言うことに反対することもなく親にも入団を勧め

られたので特に意味も考えずに、昼休みに音楽室で課題曲の練習をする日々がはじまった。ここに課題曲と書いたがこの合唱団、歴史と伝統があり市内全小学校から音楽の素養のある入団希望者が集まってくる合唱団で何と入団試験をパスしないと入団できない有名な合唱団だったのだ。試験があるということは不合格になる者もいるわけで当然私などが合格するわけもないと思っていたし、むしろ私は不合格になることを望んでいた（当時は歌に興味もなく、まして学外の合唱団に入ってしまったら友達と遊ぶ時間が無くなると思っていたのだから当たり前なのだけれど・・・）ところが、ボーイソプラノという特殊な声だったためか意に反して合格してしまったので、入団してからが大変だった（笑）。

歌を歌うことは好きだったが、合唱団の練習に行くのがイヤでイヤで仕方がなくいつも母親を困らせていたことを思い出す。並行して野球は続けていたので土曜日は合唱練習、日曜日は少年野球と趣の全く違う環境にいたのが今考えても面白いと思う。合唱団の年に一度の定期演奏会と少年野球の大会が同じ日になってしまったことがあり、その時には朝から野球の試合を2試合やって、車で移動中に車内で泥だらけのユニフォームから合唱の制服に着替えて公演時間ぎりぎりに合流したなんて言うこともあった（おかげで唯一出演していた定期演奏会の集合写真に写っていない）親は茶化して「芸能人みたいだね～」とか言っていたが、子供心に「合唱団面倒くさいなあ。本当にやめたい。」と感じていたことを思い出す（笑）。



川越少年少女合唱団定期演奏会

そんなことが重なって今となっては笑い話なのだが、私は合唱団をやめるために全力を注ぐという不真面目極まりない生徒となっていた。（ほんの一

例だが、風邪をひいて声が出ない、歯が抜けたのでしゃべれない、挙句の果てには顎が外れたので歌えませんとあらゆる嘘をついてやめようとしていた笑）。そんなことを1年くらいやっていたが、ちょうど変声期を迎えて本当に声が上手に出せなくなって1年半に及ぶ私の合唱団生活は幕を閉じることになる。

それからというもの、大学3年になるまで音楽とは全く縁のない生活をおくり、中学、高校、大学と野球一筋の生活を送ることになるのだがそんな私が今オペラ歌手として生活していることに子供時代の合唱団での思い出が少なからず影響していると感ずることがあり、子供の時の経験が人生の何かに関わってくることの面白さを実感している。きっと無駄な経験ってないんだろうな。

「法律を勉強しながら直面した現実」

話はそれからしばらくたった大学時代に飛ぶ。大学では法学部法律学科に所属していて形の上では法律を学んでいることにはなっていたけれど授業にはほとんど出席しないでアルバイトとサークル活動に明け暮れていたごく普通の、否それ以下の学生生活を楽しんでた。当時の私は特に目標もなくただ何となく生きていた気がする。

時はバブル経済が崩壊した直後でデフレ不況が始まる頃であったと記憶している。就職氷河期に突入して、先輩たちが就職活動に苦勞する姿を見るようになった。当時、学校にも行かずなんとなくアルバイトで入った不動産会社で法律の実務を学ぼうとしていた私は、法律の知識を知らずに非常に不利益をこうむっている人たちが、こんなにもたくさんいるという事に驚いた。そして、それを知っているにもかかわらず知らないお前が悪いとばかりに、自分の知識を利用する法律家がたくさんいることにも驚いたし悲しくなった。当時の私は法律家とは弱きを助ける者たちのことだと思っていたのだが、実は全くそんなことはなく（中には人権派弁護士など信念をもってやっている方もたくさんいらっしゃるが）、自分たちの利益の追求のためだけに法律を利用しているという社会の事実を

見せられてしまった。そしてそれがとても嫌だった。その頃から少しずつ自分の生き方について考えるようになってきた気がする。そして仕事って何のためにするのだろうと考えるようになってきた時期でもある。大学3年生のことだった。

「オペラとの出会い」

そんなことを漠然と考えているときに家でたまたま見ていた、あるテレビ番組に衝撃を受ける。人生を一変させる、オペラ歌手になろうと思った決定的な瞬間だった。その番組が「世界3大テノール 94 世紀の共演」だった。たしかサッカーワールドカップのアメリカ大会の前夜祭で行われたコンサートの映像だったと思うが、普段はクラシックなど見向きもしなかった私が雷に打たれたかのような衝撃を感じ、無心で見入ってしまったのを今でも鮮明に覚えている。



世界3大テノール

まず何に驚いたのかといえばロサンゼルスドジャースタジアムが10万人の観客で埋め尽くされ、世界同時配信で全世界10億人が見ているというものすごいコンサートだという事、更には当時の私を知る由もない3人のテノール歌手の歌声にこれだけの人間が興味を持って聞いているという事実が驚き、世界には私の知らない物凄い事があるのだという事を知ったきっかけとなった。

観客が映し出されるたびにいわゆるロック音楽などの熱狂的な感じではなく、穏やかにオシャレに音楽を楽しんでいる嬉しそうな表情がとても印象的で、こんなにも人を楽しませることができる演奏家って素晴らしい人たちだなあと感じて見ていた。だんだん見ていくうちに、「AVE MARIA」という曲(たぶん私の唯一知っている曲だったの

かもしれないが)を聴いているうちに突然「俺も歌いたい!」という衝動にかられ、コンサートが終わるころには「俺もこの人たちと同じような人を幸せにする仕事がしたい!」と感じていたことを思い出す。

「恩師 K先生」

それからの自分は何かにとりつかれたかのように3大テノールのCDやDVDを買いあさり毎日のように聞き、声楽の魅力のとりことになっていく。なぜこの時歌いたいと思ったのかは未だに大きな謎であり、なぜ根拠も自信もない私が歌手としての道を歩いていくことに盲目的に取り組めたのかは未だ以って非常に不可思議なことではあったが、オペラ歌手として歌いたいという思いは日に日に増していき、ついには声楽の先生にレッスンを習うことになっていく。人生の転機には影響を及ぼす師に出会うことがあると聞くことがあるが、まさに私の場合もあてはまり、この声楽の先生との出会いによって人生が一変することになっていく。

音楽とは無縁の生活をしていたので先生を探すといっても何のつてもなかった私は、両親に歌を歌いたいという事を伝え誰か先生に教えてもらいたいと話すことにした。両親はとても驚きはしたものの反対するようなことはなく私の思いに賛同してくれた(とてもありがたかった)。父の知人を介して声楽の先生(これからK先生と呼ぶことにする)を紹介して頂き、電話にて思いを伝えてレッスンをお願いすると、一度会いに来なさいとお話を頂き、そしてK先生と初めてお会いする日を迎えた。

面白い出会いだった。K先生は私の声を聞くこともなく、レッスンをやるともやらないとも言わず、とにかく歌をやる覚悟はあるのかという事を私と同席していた両親にしきりに聞かれていたことが印象的だった。覚悟といわれてもその時はオペラ歌手になろうなどとは思っていなかったのですが、とにかく歌を習いたいという事を一生懸命お話ししたと思う。そんな会話が続けていたが、しばらくするとK先生が思いもよらない衝撃的なことを私

たちに話してきた。「歌をやりたいなら大学に入りなさい……。」「東京芸術大学を受験してみなさい。」と。どうしてこんなことをおっしゃったのか真意の程は定かではないが、とにかく声楽のレッスンを受けるために K 先生に会いに来ている私としては「はい、ではやってみます」としか答えられなかった。そしてその一言によって私のオペラ歌手への第一歩となる東京芸術大学入学への戦いが始まるのである。それはまた血のにじむような地獄の戦いでもあった。そしてその後の長く苦しい苦悩への始まりでもあった……。

(次回号に続く)